

- 日 時：2020年3月8日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：「主よ、信じます。」
- 説教者：飯島 信
- 聖 書：新約 ヨハネによる福音書 9：13-41（新 p184）
- 讃美歌：280「馬槽（まぶね）のなかに」 575「球根の中には」

お早うございます。

今日は、Eさんの立川教会での最後の奏楽となりました。友人のHさんも、茨城県の水戸からEさんの奏楽を聴きに礼拝に出席して下さいました。新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、礼拝を短めにし、終わった後、私たちとして、ささやかではありますがEさんへの感謝の気持を現したいと思っています。

初めに、簡潔に、私とEさんとの出会いをお話しします。

ここに、2016年度の礼拝出席者名簿があります。そして、私が立川教会に赴任した最初の2016年3月27日の礼拝に、Eさんの名前が記されています。と言うことは、Eさんと立川教会との関わりは、私と全く同じ年月であったことを改めて知らされました。

Eさんと初めて出会ったのは、それより数ヶ月前から始まった、若い人々を中心とする勉強会の場でした。言葉を交わしながら、Eさんが大学の後輩であること、礼拝の奏楽が出来ることを知りました。そして、知り合ってからまだ日が浅いにもかかわらず、立川教会の奏楽をお願いし、快く引き受けて下さったのです。それから月に一度、数えれば約50回にもなる礼拝で、奏楽の奉仕をして下さいました。

皆さんもお気づきのように、ヒンプレーヤーと違い、奏楽者がオルガンを弾いて歌う讃美歌は本当に歌いやすいものです。私たちの歌声に合わせてオルガンを弾いて下さるからです。専任の奏楽者はいないものの、この教会には4人も奏楽者が与えられていました。何という恵まれた教会かと思います。その中の一人であったEさんの奉仕が今日をもって終わることは、とても残念であることは言うまでもありません。単に奏楽奉仕者の一人がいなくなるだけでなく、主日礼拝に出席している最も若い友人を失うことでもあるからです。

でも、私たちは、Eさんを惜しむ以上に、彼女の新たな旅立ちを心から祝福したいと思います。法律の世界での翻訳と言う安定した職業から退き、全く未知の世界へ、しかも収入を得る仕事ではなくボランティアとして奉仕する世界へと飛び込んで行くのです。

Eさんがなぜそのような道を選び取るのかと思います。

誰が見ても楽な道ではありません。むしろ困難な道です。

にもかかわらず、自ら退路を断ってその道へと進ましめたものは何かを考えるのです。

Eさんに、ある言葉を贈ります。

その言葉を語った方は、私の学生時代に大学で聖書研究会を主宰し、私もそれに出席していました。旧約学を教えていた秋田稔と言う方です。彼が行った1968年の日本基督教学会での発題から2ヶ所を選びました。

初めの1か所です。

ギリシャの哲学者ソクラテスについて語る中での言葉です。

「人間は自らにとって単なる所与ではなく課題であり、また単に問いを發せられているに止まらず、その答えを刻々に出すべき当のものである。かくて、人間は己自身に目覚めるべき存在として自覚的存在であり、己自身への課題解決を求めて生きる存在として自己形成的、自己實現的存在である。」

次の1か所です。

ヨハネによる福音書に触れて述べている言葉です。

「真の人間となる道は、神がひとり子を賜わる程に人を愛して、かれに永遠の生命を与られたように、人は隣人に対しておのれをささげ、これを生かすことである。すなわち、おのれの生命を捨てて（ヨハネ第一、3:16）、隣人に生命を得させることにおいて、おのれが生きる道である。このような愛に人と人とが相互に生きること（ヨハネ15:12その他）において、愛の波紋は交錯しつつ広がり、光の交わり（コイノニア）が地上に實現する。」

アジア学院と言う、アジア・アフリカの農村指導者養成のための学び舎において、アジアやアフリカから来た異国の文化に生きる留学生に囲まれながら、自分自身の存在そのものを課題とすることに目覚め、彼らから問われつつも答えを見出して行く自己形成の道を歩まれることを願っています。

そして又、隣人に生命を得させることにおいて、おのれが生きて言う愛の波紋を広げ、学び舎に光の交わりとしてのコイノニアを實現する働きをと祈ります。

今日与えられた聖書の箇所に触れます。

生まれつき目が見えなかった人が癒される話しです。

目が癒されたその瞬間、彼に見えたものは何であったのかをご一緒に考えたいと思います。

確かに、これまで見えなかった人や物の全てが見えるようになりました。

どれほどの歓喜であったか分かりません。

それまでの暗闇の世界が、一瞬の内に、光にあふれた世界へと変わったのです。

しかし、福音書記者ヨハネがこの箇所では記していることは、そして私たちが理解し、受け取めなければならないことは、単に肉体的に目が開かれたと言うことだけではないように思います。それよりもっと大切なことがあります。それは、彼にとって、真に力あるお方はどなたかを知る心の目が開かれたことです。

真に力あるお方はどなたかを知らされた彼にとって、ユダヤ社会の権力の座に君臨していたファリサイ派の人々など、恐れるべき何者でも無くなりました。それどころか、むしろ哀れむべき存在とまでなります。27節です。

27a：彼は答えた。「もうお話ししたのに、（あなたがたは）聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。」

そして、重ねて次のように言うのです。

27b「あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」

驚くべき言葉です。

目が見えなかった時の彼は、目が見えないと言うそのことによって、罪を犯した存在として蔑まれ、神殿の入り口に座り、物乞いをし、人々の哀れみにすがって生きていたに違いありません。そのような彼にとって、権力の座にいるファリサイ派の人々など、遠い雲の上の存在であったとしても不思議ではありませんでした。しかし、肉体の目が癒されると同時に心の目も開け、自分の身に起きたことを通して真実に力ある方を知った今、それまでの雲の上の存在であったはずのファリサイ派の人々は、彼にとってもはや何の力も持たない存在となりました。

これこそ、福音書記者ルカがマリアの賛歌に記した次の御言葉が意味したことではないでしょうか。即ち、(p101)

ルカ 1:51：主はその腕で力を振るい、

思い上がる者を打ち散らし、

ルカ 1:52：権力ある者をその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

と言う御言葉です。

そして、彼は、自分の身に起きたことを通して、「主よ、信じます」(9:38)との告白に導かれるのです。

私は、今日の箇所を通して、改めて教えられることがありました。

言葉ではなく、力ある業こそ、真理を明らかにするということです。

100回もの労りの言葉より、彼／彼女の背負っている重荷を、少しでも分かち合い、自らの荷とすることです。

100回もの慰めの言葉より、たとえ一言も言葉を発しなくても、彼／彼女の悲しみを深く受け止める者となることです。

そして、100回もの励ましの言葉より、彼／彼女が直面している困難な課題の一つを具体的に取り除くことです。

その時、人は、心の目でその人を見、心で出会うことができます。

主イエス・キリストとの出会いは、心の目でイエス様を見出し、心での出会いであったように思うのです。

私たちの交わりも又、お互いを心の目で見出し、心で出会える交わりとなることをと思います。

祈りましょう。